第 165 回「言葉の院外処方箋」

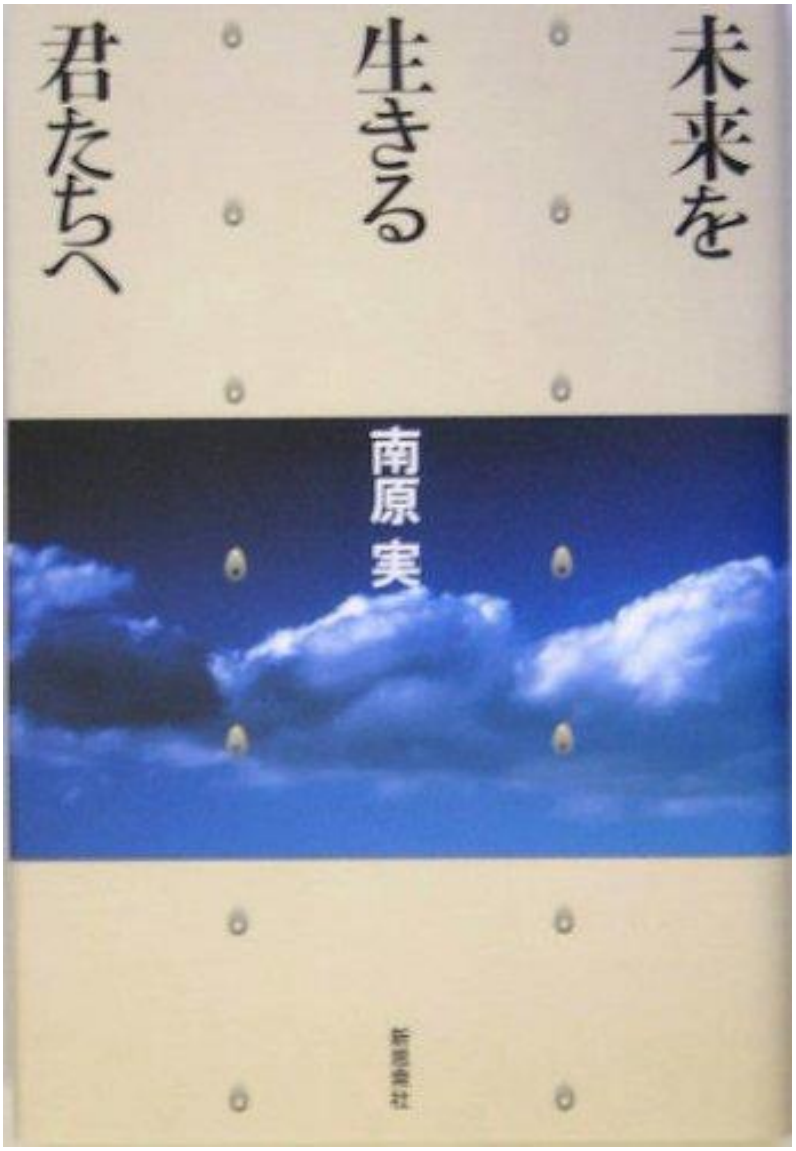
新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

『「未来に生きる君たちに」 ～ 全体的な「いたわり」の理解 ～』

712 年に編纂された『古事記』に登場する医療の原点を教えてくれる大国主命の 出雲大社から 8 キロほど峠を越えて美しい日本海に面した小さな村が、筆者の生まれ育った島根県出雲市大社町鵜峠(うど)である。隣の鷺浦地区と合わせて鵜鷺(うさぎ)と呼ばれている。713 年に編纂が命じられたという『出雲国風土記』にも登場する歴史ある地である。 筆者の人生は、少年時代の原風景、恩師との出会い、読書遍歴{内村鑑三（1861-1930）・新渡戸稲造（1862-1933）・南原繁（1889-1974）・矢内原忠雄（1893-1961）}であった。 内村鑑三、新渡戸稲造、南原繁、矢内原忠雄から『いかに生きるべきかの基軸』を学んだものである。

筆者は、『日本国のあるべき姿』として『日本肝臓論』を提案している。 肝臓は、1)正常な時には分裂せず、静止状態にある。 2)しかし いざという時には再生能力抜群で、3分の2を切っても2週間で元通りになる。 3)異物に対しては寛容性をもつ。 だから肝移植は容易にできる。 4)また解毒代謝作用がある。 5)さらに血中を流れているたんぱくの80%は肝臓で作られていると言われている。 『日本国も肝臓のような国になれば、世界から尊敬されるという趣旨』である。 人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担と お互いの非連続性の中の連続性、そして、障害時における全体的な『いたわり』の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのであろう。

アメリカの海洋生物学者：レイチェル・カーソン（Rachel Carson 1907-1964）によって『環境問題のバイブル』と言われる『沈黙の春（Silent Spring）』（1962 年）が出版された。日本語訳は、戦後初代東大総長であった南原繁のご長男：南原実(1930 - 2013)によって出版されている(1974 年 青樹梁一というペンネームの為に知る人ぞ知る）。 筆者は、南原繁没 30 周年記念事業で『南原繁研究会』(2004 年）スタートした。 以来、南原実氏とは毎年、wife と一緒にお逢いして、夕食をしながら、親しい深い学びの時が与えられたものである。まさに、筆者にとっては貴重な得難い『人生の特別ゼミナール』の時間であった。 『おろかな考えは偶然が運んでくるが、かしこいことばは叡智からくる』(『未来に生きる君たちに』南原実著 2005 年）(画像)が 鮮明に想い出される日々である


未来を
生きる
君たちへ
南原 実
新潮社